

探討報紙版面設計傳達語言與非語言結合的相乘效果 —以日本現代與近代時期的《讀賣新聞》為比較—

落合由治

淡江大學日本語文學系教授

摘要

目前語言相關的諸多研究領域中，傳達語言跟非語言結合的相乘效果特性的研究，逐漸被學界關注。本論文不是設定於截止目前常被關注的訴諸視覺效果的動畫等，而是採樣自平面報紙版面設計來做研究，釐清訴諸文字的平面媒體中，如何結合語言跟非語言的優勢而達到相乘效果的最佳傳達方式。採樣的平面媒體為世界的公認最大報社發行的《讀賣新聞》。堅守實際考察語言跟非語言的優勢而達到相乘效果的傳達特質為切入點，先以現代發行的報紙為考察標的，進而與近代(明治期至大正期 1877 年-1917 年)做比較。釐清日本現代與近代間的報紙版面設計以及變化的趨勢。

考察結果顯示：現代平面媒體中結合語言與非語言的相乘效果特徵，利用指引內容的表現手法，區隔出版面內容的配置與實質的內容。此再試著與近代平面媒體比較，發現現代平面媒體中的結合語言與非語言的相乘效果特徵，其實在 20 世紀初期已經出現。而合理推測出現代平面媒體乃是為了使言語與非言語要素，聚焦於版面的內容之上，而下意識設計而出的。

結合語言與非語言的相乘效果，往往就情報通信技術上的關係來探究。事實上證明結合語言與非語言的相乘效果，應用於平面媒體上是扮演著不可或缺的重要角色。只要將此事實於課堂之上多次提醒日語學習者注意的話，對於閱讀、接收日本平面媒體訊息的日語學習者，是有極大的助益。可見應用於日語教育的價值亦不可小覷。

關鍵字：語言與非語言相乘效果 平面媒體 版面 設計

語言與非語言要素

受理日期：2014.03.10

通過日期：2014.05.23

A newspaper page design as multi-modal expression: From the view point of comparison on printing plate of the present age and modernization age on "Yomiuri Shimbun"

Ochiai Yuji

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

The research on the expressional multi-modal characteristic is progressing in many areas of investigation. This paper has performed the trial which regards the feature of multi-modal expression by an ordinary press media as a case study. The multi-modal linguistic and nonverbal feature of page in present-day is caught at first, using "Yomiuri Shimbun" which is the maximum newspaper globally as data. Then, the change and comparison of the space design from the Meiji term to the Taisho term were performed. Then, the change of page design and comparison from the Meiji term to the Taisho term is considered.

As a result, it has turned out that the multi-modal linguistic and nonverbal feature in present-day page is functioning as a meta-text in which the division piece of the contents is mainly shown. As compared with modernization age, establishment of the multi-modal expression as such a meta-text is already seen at the beginning of the 20th century. It is considered because it comes to use a language and a non-linguistic element as an intentional design in order to attract the attention to the contents of news page.

Multi-modal expression has played the important role by the everyday use by press media. Therefore, since such feature can attract a student's attention, it can be said that it has great value in the application to Japanese education.

Keywords : multi-modal, press media, page, design,
language and non-linguistic element

マルチモーダル表現としての新聞紙面デザイン —現代と近代の『読売新聞』版面の比較から—

落合由治

淡江大学日本語文学科教授

要旨

現在、言語に関係した多くの研究領域で、表現のマルチモーダルの特性に注目した研究が進んでいる。本論文は、従来、注目されてきたマルチメディアや動画ではなく、事例研究として、在来印刷メディアでマルチモーダル表現の特徴を捉える試みをおこなった。資料として、世界的にも最大の新聞『読売新聞』を用い、まず現代の紙面でのマルチモーダルな言語的・非言語的特徴を捉えた後、明治期から大正期にかけての紙面デザインの変化と比較をおこなう形で考察を進めた。

その結果、現代の紙面でのマルチモーダルな言語的・非言語的特徴は、主に紙面内容の空間的まとまりと内容の区切れを示すメタ・テキストとして機能していることが分かった。近代との比較してみると、こうしたメタ・テキストとしてのマルチモーダル表現の確立は20世紀初頭に既に見られ、言語・非言語要素を紙面の内容への注目を集めるために意識的なデザインとして用いるようになったと考えられる。

マルチモーダル表現は、印刷メディアでの日常的使用で重要な役割を果たしており、そうした特徴を応用して学習者に注意を促すことで、教育現場への応用にも大きな価値を持っていると言える。

キーワード：マルチモーダル 新聞 紙面 デザイン
言語・非言語要素

マルチモーダル表現としての新聞紙面デザイン —現代と近代の『読売新聞』版面の比較から—

落合由治

淡江大学日本語文学科教授

1. はじめに

複数の種類の異なる表現や活動が相互に作用して全体として機能している表現構造は、マルチモーダルな表現と言われる¹。現在、言語表現と非言語表現との交錯領域であるマルチモーダルな分野での研究が活発化している。マルチモーダルな研究対象は、情報工学、人間工学、情報処理から各種のメディアコンテンツ制作技術やメディア研究、教育学、社会学、そして社会言語学、日本語学にもおよび、言語表現と非言語表現や行動が関係する対象の全体に及んでいる²。

1.1 研究の動向

従来は、具体的な言語の使用場面や使用ジャンルを捨象することで言語に限って研究を進めてきた言語研究においても、実際に言語が使用されている場面や表現ジャンルを視野に入れたマルチモーダルな研究対象の再検討と拡大が求められている³。本論文では、従来、

¹ マルチモーダルはさまざまな学問領域で使用されている用語で、各研究領域で何を対象とするかは相互に異なる。日本では情報通信関係の研究で最も活発な研究が進められている。一例として、幅広く情報伝達に関わる各種表現の相互作用全体をマルチモーダルと捉えている情報通信技術での定義は、三吉秀夫、関進、綿貫啓子（2000）「マルチモーダルインターフェイス」『シャープ技報』77号 <http://www.sharp.co.jp/corporate/rd/journal-77/12-1.htm>（2013年8月14日閲覧）参照。

² 研究動向として、Ciniiのキーワード「マルチモーダル」該当研究は1500件を超え、研究領域は理科系、社会系、文科系の広範囲の領域に及んでいる。

³ 日本語学会（2012）「特集 2010年・2011年における日本語学界の展望」『日本語の研究』8-3号参照。日本語学でのマルチモーダルの研究として野村眞木夫（2010）「マルチモーダル・テキストとしての絵本 一言語テキストと絵画テキストの関係性と類比性」『上越教育大学研究紀要』29、野村眞木夫、畔上歩美（2011）「絵本『ごんぎつね』のスタイルとマルチモダリティ」『上越教育大学研究紀要』30、野村眞木夫（2012）「文学テキストにおけるマルチモダリティの可能性：物語絵本から Extremely Loud and Incredibly Close まで」『上越教育

個別に扱われてきた各種の言語非言語の表現領域の複合的表現機能を解明する研究を広く「マルチモーダル」研究と定義し、今回は、台湾の日本研究や日本語教育で広く生教材として利用されている新聞を研究対象に、その「マルチモーダル」な表現的特徴を考察する。

従来の日本語分野での「マルチモーダル」言語研究は、「マルチジャンル」表現として視覚表現と言語表現を扱う泉子・K・メイナード（2008）や主に言語表現と随伴する表現行動の相互作用を扱う社会言語学会（2012）、メディア研究の視点からメディアコンテンツを分析している三宅和子・佐竹秀雄・竹野谷みゆき編（2009）などがある⁴。また、日本語教育の視点からも試論が出されており、門倉正美（2007）、同（2011）⁵を始め、日本語教育活動でもマルチモーダル表現の重要性が認識され始めている。

もちろん、「マルチモーダル」という用語は「多角化」「相互作用」などの訳語とともに、台湾を初めとする中華圏でも注目され、主に情報科学技術分野、医学分野、教育科学技術分野を中心にマルチメディア等の類義語として使われ、各分野で広く研究が進んでいるが、言語表現領域でも、今回取り上げる従来メディアである新聞の紙面デザインに関しても、まだ注目されてない⁶。もちろん、今回取り上

大学研究紀要』31を参照。こうした研究は、従来の文系理系の学問ジャンルを越える分野に成長しつつあり、現在の日本での学際的研究状況は坊農真弓・高梨克也（共編）（2009）『多人数インタラクションの分析手法』オーム社に示されている。

⁴ 泉子・K・メイナード（2008）『マルチジャンル談話論—間ジャンル性と意味の創造』くろしお出版、社会言語科学会（2012）「特集相互作用のマルチモーダル分析」『社会言語科学』14、三宅和子・佐竹秀雄・竹野谷みゆき編（2009）「特集：現在（いま）を読み解くメソドロジー」『メディアとことば』4参照。

⁵ 門倉正美（2007）「リテラシーズとしての〈視読解〉—「図解」を手始めとして」『リテラシーズ』3P3-18、門倉正美（2011）「コミュニケーションを〈見る〉—言語教育におけるビューイングと視読解（特集 日本語教育が育成する日本語能力とは何か）」『早稲田日本語教育学』8・9P 115-120参照。また、

⁶ 中華圏の学術雑誌 CEPS、修士博士論文 CETD のデータベース「華藝」には、「multi-modal」のキーワードで156件の登録があるが、分野は「応用化学」「医学」など理科系の情報科学関係に集中し、人文科学系での使用は10件である。また、人文分野では、語義も「多角的」「相互作用」など一般的な用語としての使用であり、新聞に関するものはもちろん、複合表現分野の質的相互作用による質的統一機能を意味する「マルチモーダル」の現在の使い方での用例は今のところ見当たらない。（2014年3月6日現在）

げる新聞など印刷メディアの紙面デザインについては、今までも台湾では「圖像學」「記號學」的視点や「版面設計」的観点で多くの研究が出されているが、前者の研究方法は、ある表現物の中の一部である「図像」を切り出し、その意味をその表現物全体の構成から切り離して、他の文脈や資料の中で解釈するいわゆるイコノロジー、あるいは記号学的分析である。また、後者の目的は、紙面の美術的感覚的デザインで言語表現に関する注目点は基本的に含まれない。今まで台湾で研究されてきたこうした印刷メディアの図版やデザインの研究は、ある表現物全体の中にある各要素の用語作用に注目して、質的統一体として表現物の中でのある要素の機能を探る「マルチモーダル」研究とは研究方法と視点が異なる⁷。

1.2 本研究の方法と内容

そこで、本論文は、マルチモーダル表現の歴史的変化の視点から、事例研究⁸の形で現代の紙面デザインと明治期から大正期前半までの新聞紙面のデザインとの比較によって、紙面のマルチモーダルの表現の特徴を考察してみたい。

新聞を取り上げた理由は、現代日本では新聞などの印刷メディアはテレビやインターネットに押されて、次第に若い世代の読者を獲得しにくくなり、重要度が低下しつつあるが、以下の図1のように情報の質の点では依然として最高の信頼を集めているからである⁹。しかし、山本文雄（1998）が述べるように、日本近代のメディアは欧米の印刷メディアの輸入から始まって、表記体系の違いもあって次第に日本独自の発達を遂げたものであり、当初から順調に発達し

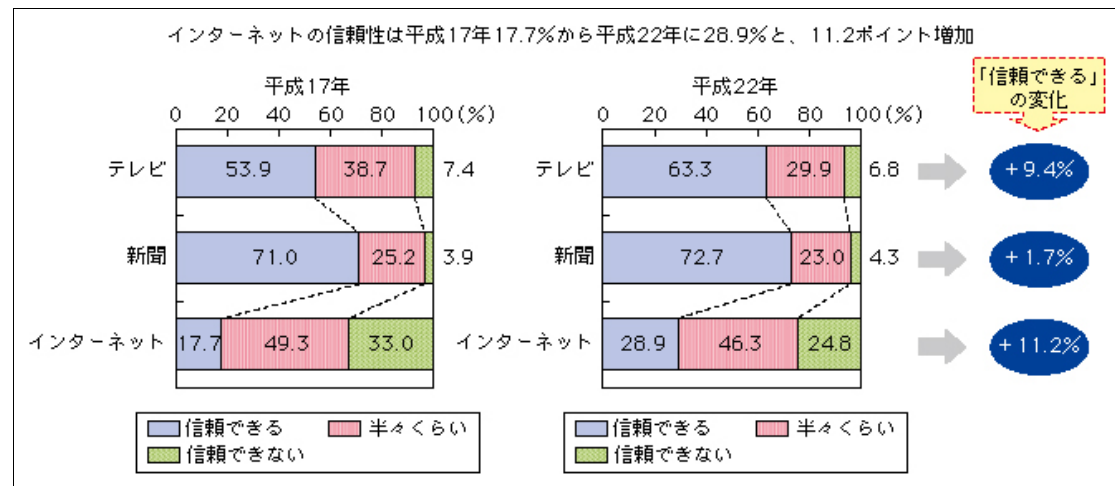
⁷ 「華藝」には、「報紙」関係研究が1991件あるが、「multi-modal」のキーワードが付いた論文は見当たらない。「圖像」を扱った論文は7件でいずれも、写真や広告の歴史的研究や美術設計に関する論文である。（2014年3月6日現在）

⁸ マルチモーダルな研究対象は質的統一体で、資料の一部を分析して取り出す量的方法よりも、質的方法が適している。質的研究における事例研究の方法については、吉永崇史（2011）「経営組織論における質的研究とその意義」『質的心理学フォーラム』3P73-83、村上祐介（2011）「教育学における事例研究の方法論再考：定性的研究における比較の方法（〈特集〉教育学における新たな研究方法論の構築と創造）」『教育學研究』78-4P398-410 参照。

⁹ 総務省（2011）『平成23年版情報通信白書』<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/h23.html> 参照（2014年3月7日閲覧）

たのではない。明治時代に読者を獲得し、紙面や内容を工夫し、信頼を集めるまでに 20 年以上の時間がかかっている¹⁰。

図 1 日本でのメディアの信頼性



(出典) 総務省 (2011) 『平成 23 年版情報通信白書』
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h23/html/nc213230.html>

日本のメディア発達史から見ると、近代日本では新聞等の印刷メディアの信頼性が確立され、発展するまでに欧米とは異なる様々な表現上の工夫や技術的発展が必要であったと考えられる。そこで、今回の考察では内容の理解に深く関わる紙面デザインを中心に、高い信頼を集めている現代の新聞と発展期の近代の新聞とを比較することで、重要なデザイン技法としてのマルチモーダル表現が発展していく過程を見ることにした。考察は以下の手順で進めた。

(1) まず、現代の新聞デザインについてマルチモーダルの視点から言語表現と非言語表現の関係について見る。事例研究の資料として、紙面デザインの分かる『読売新聞』(以下、『読売』)の縮刷版を用いる。サンプルは 2011 年 10 月 1 日の紙面である。紙面デザインは短期間にたびたび変更されることはなく、一定期間継続して用いるのが普通で、サンプル数の問題は生じない。

(2) 次に、現代でのマルチモーダルなデザインの起源が、歴史的にどこまで溯れるかを、新聞の歴史的資料で考察する。歴史資料

¹⁰山本文雄編著 (1998) 『日本マス・コミュニケーション史 (増補)』 東海大学出版会の第 1 部「明治時代前期」参照。

は「ヨミダス歴史館」から各時期のサンプル（創刊期 1877 年から 5 年おきに、1882、1887、1892、1897、1902、1907、1912、1917 の各年度の 1 日の紙面）を用いる。当時の新聞は鉛活字を主に用いた活版機械印刷で、活字や版木を型枠に嵌め、図版や写真等はその都度版面を鉛の活版か木版にして紙面デザインをしていたため、紙面デザインの変更は容易ではなく、5 年に 1 日のサンプルでも十分に質的事例としうる¹¹。また、従来の広告学や新聞学の通説では明治期と大正期の間に大きな断絶があり、本格的な広告や紙面デザインの発達は大正期からとされ、発表者の『台湾日日新報』の広告調査でも、その発展区分が認められたため、今回は明治期から大正期前半までの変化を中心に見る¹²。

（3）以上の現代と近代のデータについて、マルチモーダル分析を以下の手順で進める。

- 1) まず、紙面デザインについて、見出しの位置、欄の区切り、活字の大きさ、振り仮名の有無、図版や写真の有無、広告の位置などのポイントを中心にコーディングし、特徴を整理する。
- 2) 次に、記事に関わる言語表現の内容とビジュアル表現（記号などの視覚的要素、見出し等のデザイン等）について内容と形式を整理し、記事の伝達意図等と関連させながらコーディングし、表現特徴を整理する。
- 3) さらに、広告、写真、図版を取り出して、（2）と同じ方法で特徴を整理する。
- 4) （1）（2）（3）の結果を対照比較して、類似点と相違点、および相関性を明らかにし、通時的変化をたどる。

以上の方法で、新聞におけるマルチモーダル表現の推移に関する

¹¹ 新聞の発達史については春原昭彦（2003／2007）『日本新聞通史四訂版』新泉社を参照。印刷技術関係の資料は日本新聞博物館

<http://newspark.jp/newspark/index.html>（2013 年 8 月 14 日閲覧）参照。

¹² 落合由治（2012）「『台湾日日新報』の掲載広告に見る身体性表象」『台湾日本語文学報』31P153-178、落合由治（2012）「昭和前期『台湾日日新報』紙面のマルチジャンル論的視点による考察—広告と記事のデザインを中心に—」『日本論叢』26P175-200 等を参照。

作業仮説的な指標を提示してみたい。

2. 『読売』の現代の紙面デザイン

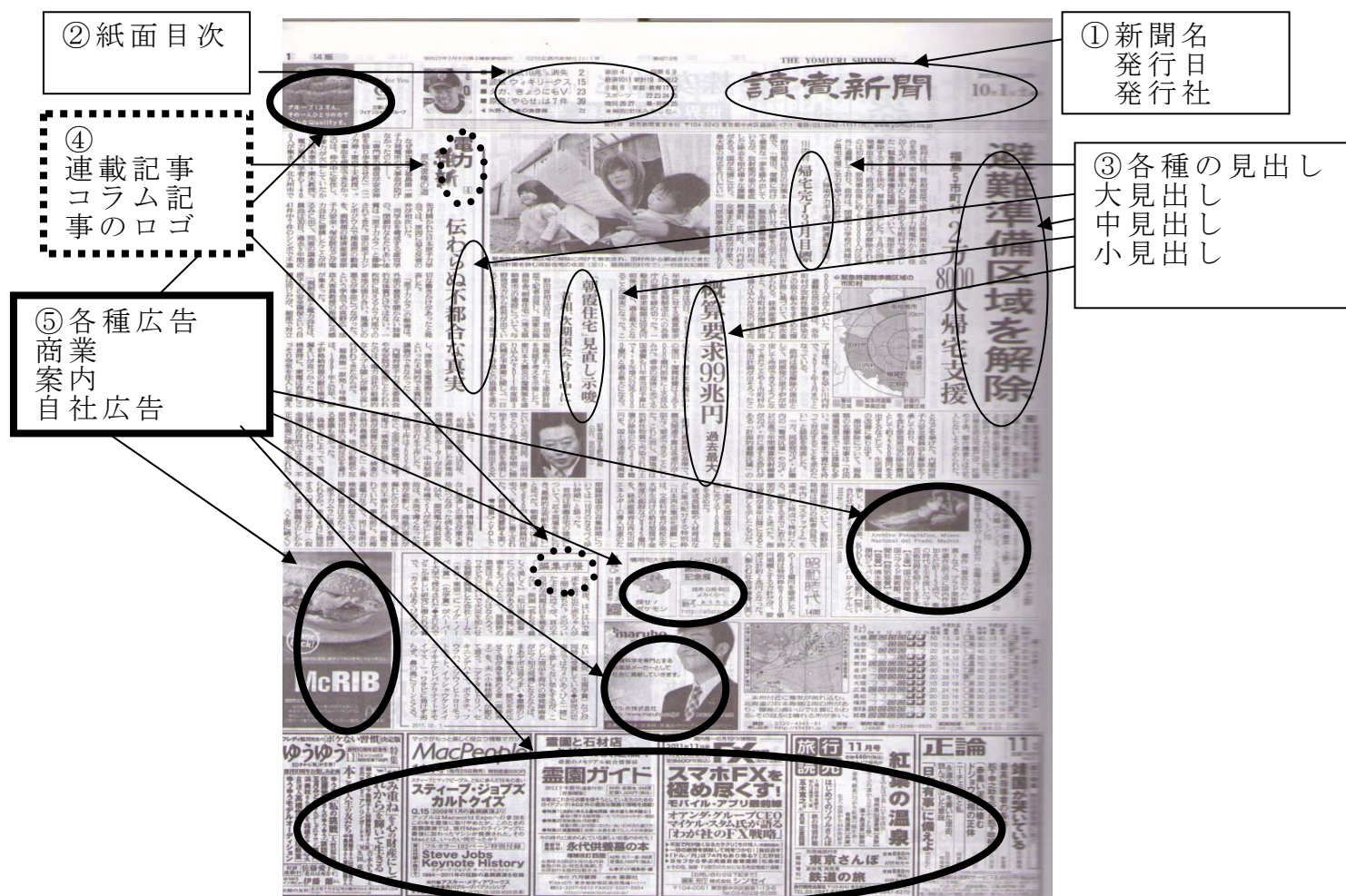
以下では、マルチモーダルな視点から捉えた『読売』の紙面デザインの変化の概要を述べる。

2.1 現代の紙面デザインの特徴

最初に現在の『読売』であるが、第1面の紙面デザイン例を以下の資料1-1に示す。デザインに関わる要素としては、言語要素と非言語要素があり、二種類の表現要素が組み合わされて紙面として統一的な構造をなしている。

2.2 現代の紙面デザインにおける言語要素の機能

資料1-1『読売』2011年10月1日日刊版の言語要素紙面配置例



(出典) 読売新聞社 (2011)『読売新聞縮刷版 2011年10月』読売新聞社紙面から論者作成

非言語要素は、言語が示す内容と密接不可分な関係にあり、両者

が一体となることで紙面デザインは機能している。なお、こうしたデザインは新聞社によって用いる非言語要素の位置、形状や用法が異なる点はあるが、基本的要素は現代の日本の新聞社ではすべて共通している¹³。

まず、言語要素の配置について見る。以上のように、現代の新聞紙面では機能として相互に異なる言語要素が複合して一つの紙面で使用されている。まず、新聞社が社として用いている言語要素として、①新聞名と発行日、発行社表示と②紙面目次がある。これらは、図書で言えば、図書の標題と目次にあたる部分で、これ以外の内容が、ある新聞社の記事や広告であることを統括して示す表現であるメタ・テキストとして使用されている。次は、新聞としての内容に関する言語要素で、③各種の見出しは、同じ大きさの活字で配置された隣接する記事本文や非言語要素全体に対する標題であると同時に、概要を示すガイドであり、さらに強調点をアピールするキャッチ・コピーとしての機能をも複合して持っている。そして、見出しの一種として④連載・コラム記事ロゴがある。③のついた記事がいわゆる時事的な出来事や事件をその都度報道し、論評する報道記事であるのに対して、④はあるテーマについて連続して報道または論評する連載あるいはコラムであることを示す、メタ・テキストとして使用されている。以上に対して、一般に記事ではない部分とされる、⑤の各種広告がある。これは、新聞社が料金を徴収して、ある目的で情報をアピールするために作っているテキストであり、目的に応じて商業、各種案内、自社などの種類がある。同じ言語要素といっても、新聞というジャンルのテキストにおいては、これら各部分の言語表現が果たしている紙面上での機能や目的は質的に全く異なっている。これらはすべて、新聞紙面の中で相互に明確に役割が

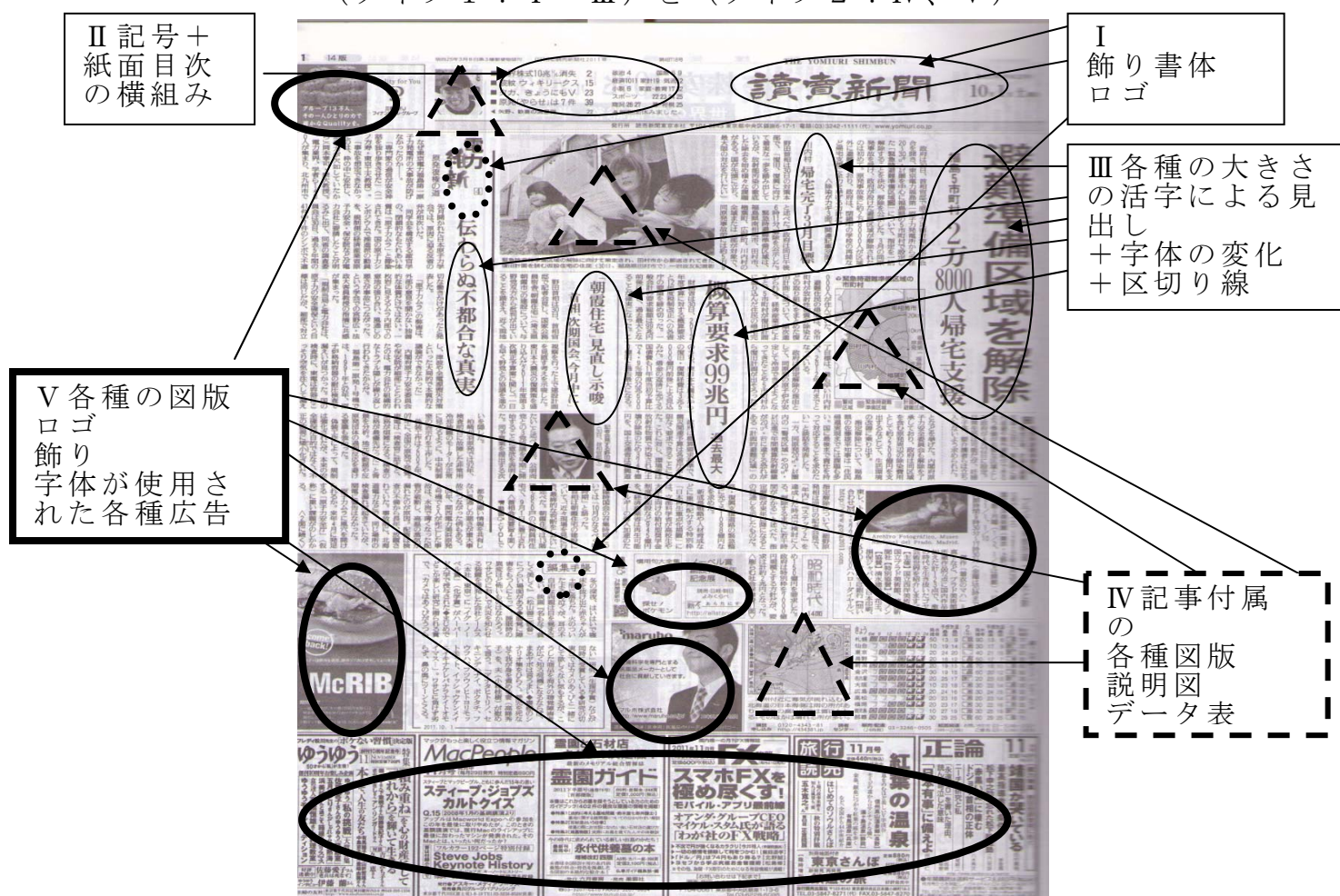
¹³ 落合由治 (2011)「メディア・テキストにおけるビジュアル要素の形式とその機能」『台湾日本語文学報』29P169-194、落合由治(2012)「日本語新聞におけるビジュアル要素の記述とその教育的活用の試み—日本語教育の教材論拡大を目指して—」『CAJLE 2012 (カナダ日本語教師会 2012 年度大会)』2012 年 8 月 2-3 日等参照。

異なる言語表現であることを示すメタ・テキストである¹⁴。

2.3 現代の紙面デザインにおける非言語要素（タイプ1）の機能

次に、非言語要素の配置について見る。以下の資料1-2のように、現代の新聞紙面では機能として相互に異なる非言語要素が複合して一つの紙面で使用されている。大きく分ければ非言語要素には二種類有り、言語要素と直接関わる非言語要素（タイプ1）と、言語要素に付随して機能する非言語要素（タイプ2）である。

資料1-2『読売』2011年10月1日日刊版の非言語要素紙面配置例（タイプ1：I～Ⅲ）と（タイプ2：Ⅳ、Ⅴ）



（出典）読売新聞社（2011）『読売新聞縮刷版 2011年10月』読売新聞社紙面から論者作成

¹⁴メタ・テキストとは、一般にテキストの中でその内容をより理解しやすくするための表現で、機能はそれぞれのジャンルで異なっている。そうしたメタ・テキストの機能はジャンル決定性に大きな意味を持っているとも考えられる。談話テキストでのメタ・テキストの役割については、木原郁子（2010）「話し合いの進行に関わるメタ言語表現—参加者の相互関係の観点から」『日本文化研究』34P485-502 参照。

まず、言語要素と直接関わる非言語要素（タイプ1）には、Ⅰのような特別にデザインされた飾り書体やロゴがある。これらは、社名、コラム・連載記事であることを示すメタ・テキストに使われている特別なデザインである。次は、Ⅱのような特別な目的を持った部分に他とは異なる記号や版組を用いるデザインで、ここでは全紙面の目次に、■記号と横組みが用いられている。Ⅲは見出しに用いる各種の字体と大きさの活字である。これは、ゴシック体（他にも、網掛けや白抜きなど）などの特別な書体デザインと大きさの変化によって、読者が見出しの内容や記事の重要性を識別しやすくし、またアピール度を変えるために使用されている。また、これらの言語要素と直接関わる非言語要素は、紙面全体の版組に関係している。資料1-2の場合、全体の版組は基準となる記事の活字の大きさと11段組になっているが、見出しは縦の場合は四段から二段の段抜きで配置されている。強調するために横組で見出しを付ける場合もある。これらⅢは版組の文字デザインである。これらは、非言語要素であるが、機能的には付加されているそれぞれの部位が他の部位と区別されることを示すメタ・テキストで、その点では、印刷メディアでのマルチモーダルな表現要素は、言語要素であれ非言語要素であれ、基本的にはその印刷部位が他と異なる部位として質的まとまりを示す、メタ・テキストである点で共通している。

表1 現代の新聞の言語要素と非言語要素（タイプ1）一覧

マルチモーダルの二大要素	機能項目	機能
言語要素	① 新聞名と発行日、発行社表示	全体がある年月日のある社の新聞であることを示すメタ・テキスト
	② 紙面目次	新聞全体の重要記事を示すメタ・テキスト
	③ 各種の見出し	記事の重要度、内容、アピールポイントを示すメタ・テキスト
	④ 連載・コラム記事ロゴ	以下が、普通の記事と異なることを示すメタ・テキスト
	⑤ 各種広告	以下が、記事ではない広告などの別のテキストであることを示

非言語要素 (タイプ1)	(Ⅰ) デザインされた飾り書体やロゴ	すメタ・テキスト 社名、コラム・連載記事など内容の大きな区切れを示し、特別な意味があることを示すメタ・テキスト
	(Ⅱ) 特殊な記号や版組を用いるデザイン	目次など、その欄が他と異なる内容を持っていることを示すメタ・テキスト
	(Ⅲ) 見出しに用いる各種の字体と大きさの活字	見出しの内容や記事の重要性、アピールポイントを識別するためのメタ・テキスト
非言語要素 (タイプ2)	(Ⅳ) スナップ写真、人物紹介の顔写真、各種の図版や写真、記事の内容を説明するための資料や要点を示す図表、データを見やすく配置した表	1) 言語表現に付随して、内容への注目を集める、理解を助ける、信頼性を高める補助支援機能 2) 大きく7種類に分かれ、それぞれ固有の機能を持つ
	(Ⅴ) 広告、デザイン文字や図版を伴った、新聞記事とは区別される各種広告	記事とは区別される商業・公共目的でのアピール

(注) 論者制作。各丸数字①～⑤は資料 1-1、ローマ数字 I～V は資料 1-2 に対応。

2.4 現代の紙面デザインにおける非言語要素 (タイプ2) の機能

次に、言語要素に付随して機能する非言語要素 (タイプ2) には、まず、一般的にいわれるビジュアル・デザインと考えられる、Ⅳのような、ある状況に移したスナップ写真や人物を紹介する顔写真などの各種の図版や写真、記事の内容を説明するための資料や要点を示す図表、データを見やすく配置した表などがある。これらは、記事そのものやコラムなどの欄の内容そのものを示すのではなく、そうした言語表現に付随して、注目を集める、理解を助ける、内容の信頼性を高めるなどの機能を持っているが、記事やコラムの内容と切り離せば、非言語的要素のみでは機能しない点であくまで付随的要素である¹⁵。もう一つは、Ⅴのような視覚的特徴を持った各種広告がある。これらは、記事とは異質なテキストとして、言語表現の様式や配置、図版に各種の特別なデザインを持っている。一般に広告には、新聞の紙面デザインと同じく、マルチモーダルな言語要素

¹⁵ 文献は掲載決定後に表示する。

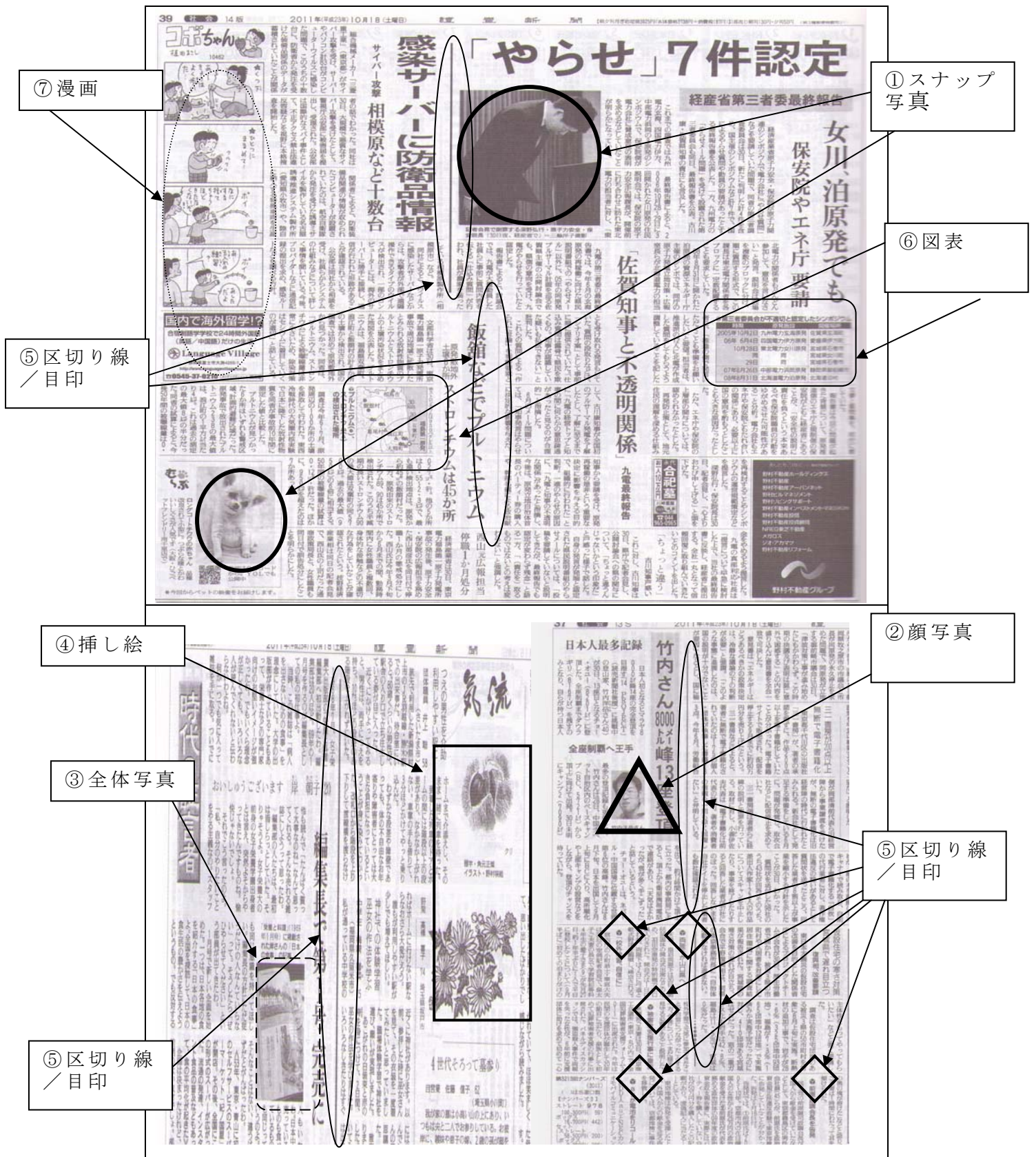
と非言語要素が複合して用いられている。いわば、各広告は、ひとつの新聞紙面のように、それぞれが独立して自己完結した言語要素と非言語要素の内容とデザインを持っていると言えよう。そして、広告は記事の最下段にまとめて配置されたり、記事の空白部分に挿入されたりする形で、記事と区別されて配置されている。

さらに、いわゆるビジュアル・デザインと考えられるⅣの各種の図版等には、さらに下位分類が可能である。資料 1-3 にその例を示した。これら新聞紙面の中で言語要素に付随して機能する非言語要素（タイプ 2）には、大きく 7 種類の様式を認めることができる。

①は事件の関係者や記事で取り上げた登場者の「スナップ写真」、②はコラム記事で取り上げられた人物の「顔写真」、③は記事で取り上げられた対象物の紹介写真で、静止的な紹介のための「全体写真」である。こうした「写真」類はいずれも記事のテキスト内容と深く関係し、記事がなければこうした図版の意味が理解できない点で、言語要素に付随して機能する非言語要素である。もちろん、①から③のような図版は、今までの図像学、記号論的分析のように、それ自体に独自の表現意図を読みとることはできるが、言語要素に付随して初めて機能する点で、マルチモーダルの視点から見れば実は芸術作品や美術写真のような独立性は持ち得ない補足的表現である。

続いて、④は記事に添えられた「挿し絵」類で、記事の見出しや欄に飾りとして付けられ、記事を目立たせるために付けているカットである。これと似た目的の注目を集めるために入れているビジュアル要素の類として⑤の「区切り線・目印」がある。これらは記事の見出しや記事の存在をアピールするための補助的デザインと考えられる。一方、⑥のように事件の背景になった場所の地図や事件に関係する数値データを表形式でまとめた「図表」は、ニュースや記事内容を一定の基準で整理して伝える意図があると言える。

資料 1-3 言語要素に付随して機能する非言語要素（タイプ 2）



（出典）読売新聞社（2011）『読売新聞縮刷版 2011 年 10 月』読売新聞社紙面から論者作成

⑦は報道目的とは関係のない「漫画」である。だが、娯楽のため

と同時に社会面や日曜欄に出ていることから一種の世相批評になっていると推測できる。以上、①から⑦まで7種類に分類できた言語要素に付随して機能する非言語要素（タイプ2）を以下の表2にまとめた。

表2 『読売』の言語要素に付随する非言語要素（タイプ2）のビジュアル要素の分類と内容

	ビジュアル要素の分類	要素の内容
①	スナップ写真	人物の表情や動き、事件の様子などを捉えた現場写真
②	顔写真	人物紹介として、人物の顔だけをクローズアップした写真または正面からの小さい顔写真
③	全体写真	風景や事物を静止的に写した写真または資料として説明に用いられている写真
④	挿し絵・カット	デザインされてコラムや記事のある部位に挿入された手書きのイラスト
⑤	枠囲い・背景塗り・目印	記事の見出しに伴って付けた「◎」などの補助的な飾りや記号および区切り線
⑥	図表	記事の理解を助ける補足資料として提示された図表、年表、地図および用語解説の囲い
⑦	漫画	政治欄、家庭欄、社会欄などに置かれる、あるストーリーや事件の諷刺を描いた漫画作品

（注）論者制作。①～⑦は資料1-3に対応。

従来の研究では、いわゆるビジュアル・デザインと考えられる各種の視覚要素として、①から⑦までのようなビジュアル要素が注目を集めることが多かった。しかし、マルチモーダル観点から見ると、いわゆるビジュアル・デザインと考えられる資料1-3のような各種の視覚要素は、いわば狭義のマルチモーダル表現で、言語表現との関係で言えば、言語表現があって初めて機能を発揮する付随的二次的な表現要素であり、先に資料1-1、1-2で見た紙面内容の質的区別を示すメタ・テキストとして重要な役割を果たしている言語要素、非言語要素（タイプ1）のほうが紙面デザインの基本機能としてはより重要で、本質的な要素と考えられる。従来の視覚情報を重視したマルチメディア研究的なマルチモーダル研究ではなく、本研究で試みた言語表現との関係に重点を置いたマルチモーダル表現研究から見ると、言語要素に付随して機能する視覚的な非言語要素（タイプ2）は、いわば狭義のマルチモーダル表現に過ぎず、紙面での

内容の質的区別に重要な役割を果たしている言語要素、非言語要素（タイプ1）のほうがむしろ機能的には基礎的で、そこから他の視覚表現が機能するような根拠になっているのである。

以上は、『読売』の紙面を例として示したが、こうした言語要素と非言語要素の機能は現代の日本の新聞の場合、各社でほとんど共通していると見られる¹⁶。

3. 日本近代の『読売』の紙面デザイン

続いて、以下では『読売』の紙面デザインの歴史的変遷をたどる。

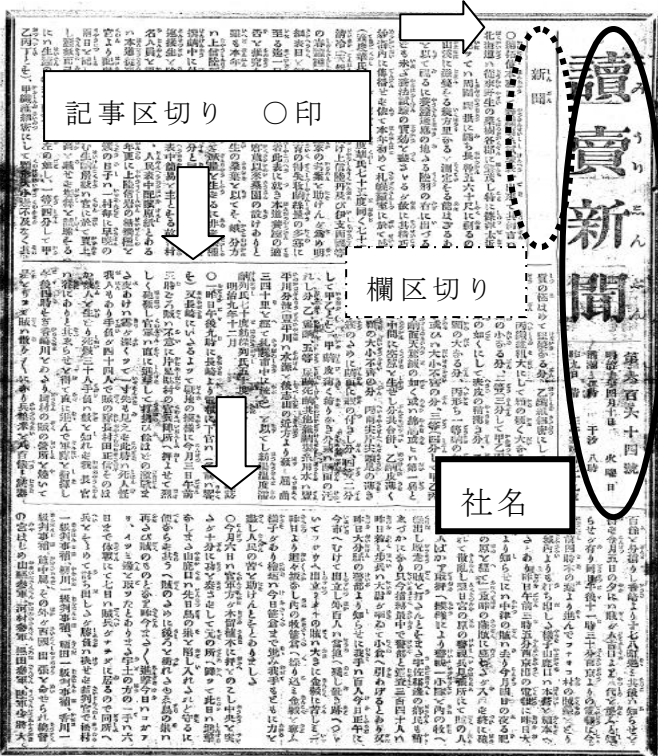
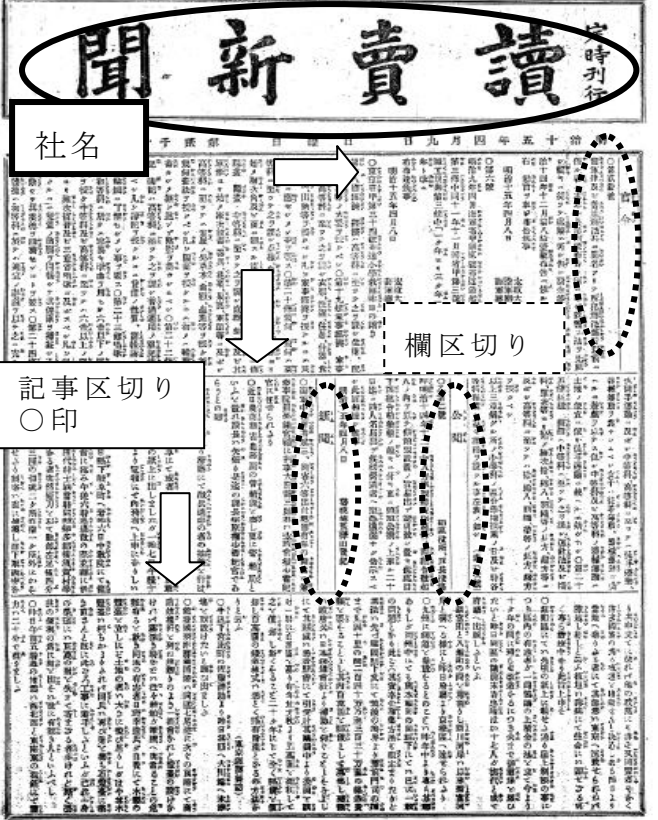
3.1 1870年代から1890年代における紙面デザインの発達

今回、サンプルに取り上げたのは、『読売』創刊の1877年から5年おきに、1882、1887、1892、1897、1902、1907、1912、1917の各年度の1日の第一面紙面デザインの変化で、以下の表3に結果をまとめた。この時期のサンプルでは、まず、注目すべき点として、この時代からすでに紙面が意識的に大きく言語要素と非言語要素を組み合わせてデザインされているということである。現代はマルチメディア通信手段や映像技術等の発展による多様なマルチモーダル表現がメディアで駆使されているが、近代を象徴する最初のメディアである新聞は、すでにそうしたマルチモーダル化した表現技術を明確に意識して製作されていたことが分かる。

1887（明治10）年の資料1では、前節の現代紙面の言語要素①非言語要素（Ⅰ）と同じく、右上に社名があり、社名の下に会社案内、号数などの資料が示されている。これらは区画線で明確に記事とは区別され、特別なデザインで配置されている。さらに、記事も現代紙面の言語要素③非言語要素（Ⅲ）と同じく、「新聞」という区切り欄で記事欄の始まりが示され、個々の記事は「○」印で区切りを示すように配置されている。

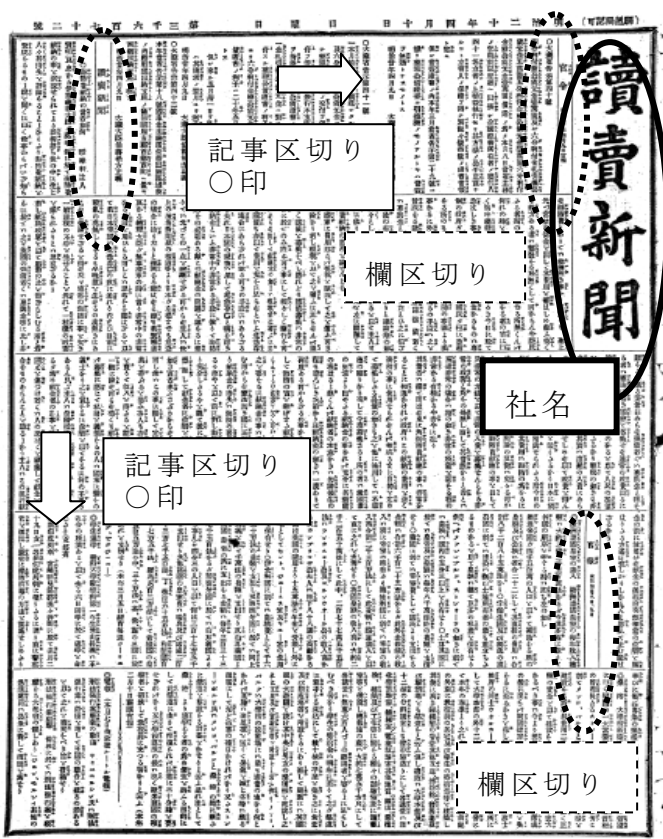
表3 『読売新聞』の紙面デザインの変化

¹⁶ 同注11参照。

年	第一面のデザイン	言語要素	非言語要素
1877（明治10）年4月10日一面		① 右上に社名 ② 社名の下に会社案内、号数 ③ 「新聞」という区切り欄 ④ 「○」で記事の区切りを示す ⑤ 漢字、平仮名＋カタカナ＋変体仮名の記事	「記事の見出しなしに、記事を並べる」 「三段組で、同じ大きさの活字で版組」 「目ルビを付ける」 「横野線で段を区切る」 「縦線で欄を区切る」 「視覚的要素は「○」のみ」
1882（明治15）年4月10日一面		① 上に社名 ② 社名の下に号数 ③ 「官令」「公開」「新聞」という区切り欄 ④ 「○」で記事の区切りを示す ⑤ 「官令」「公開」は漢字＋カタカナ、「新聞」は漢字、平仮名＋変体仮名の記事	「「官令」「公開」「新聞」は見出しなしに、記事を並べる」 「三段組で、同じ大きさの活字で版組」 「目ルビを付ける」 「横野線で段を区切る」 「縦線で欄を区切る」 「視覚的要素は「○」のみ」

「官令」「読売新聞」「官方」は最初の行に見出を付けて、記事を並べる
 五段組で、同じ大きさの活字で版組
 ルビを付ける
 横罫線で段を区切る
 縦線で欄を区切る
 視覚的要素は「○」「◎」のみ

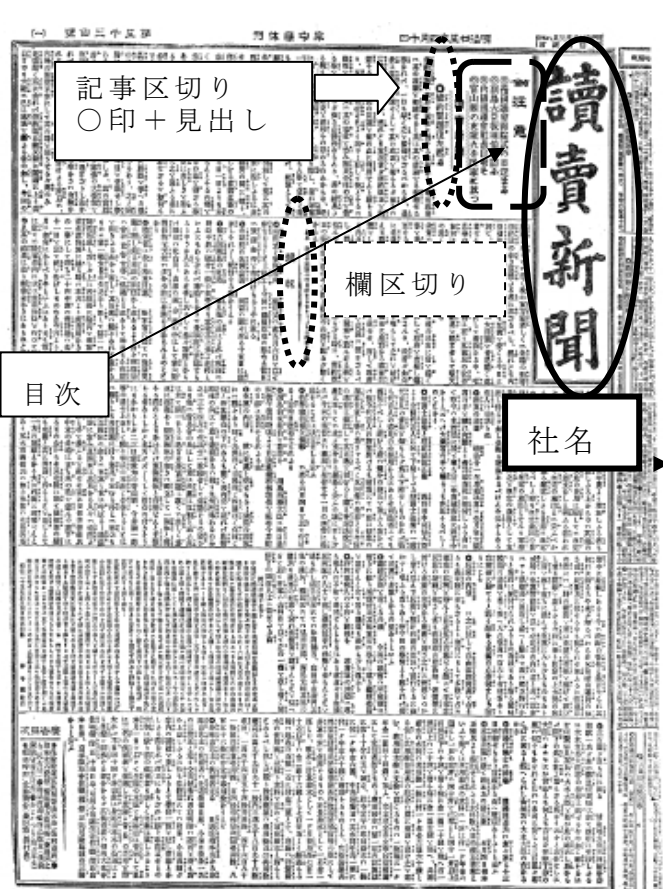
- ① 右上に社名
- ② 欄上に発行年や号数のデータ
- ③ 「官令」「読売新聞」「官方」という区切り欄
- ④ 「○」で記事の区切りを示す
- ⑤ 「官令」は漢字カタカナ、「読売新聞」「官方」は漢字、平仮名、カタカナ+変体仮名の記事



1887 (明治 20) 年 4 月 10 日 一面

「注意」は注目記事の「目次」、「読売新聞」と「雑報」は最初の行に見出を付けて、記事を並べる
 五段組で、同じ大きさの活字と小型活字で版組
 ルビを付ける
 横罫線で段を区切る
 縦罫り線で欄を区切る
 視覚的要素は「○」「◎」のみ

- ① 右上に社名
- ② 欄上に発行年や号数のデータ
- ③ 「注意」「読売新聞」「雑報」という区切り欄
- ④ 「○」で記事の区切りを示す
- ⑤ 「注意」「読売新聞」「雑報」は漢字、平仮名、カタカナ+変体仮名の記事
- ⑥ 欄外右にも小活字の記事欄が増設



1892 (明治 25) 年 4 月 10 日 一面

「最初の行に「○」+大活字+作者で見出を付けて、記事を並べる

「六段組で、同じ大きさの活字と小型活字で版組

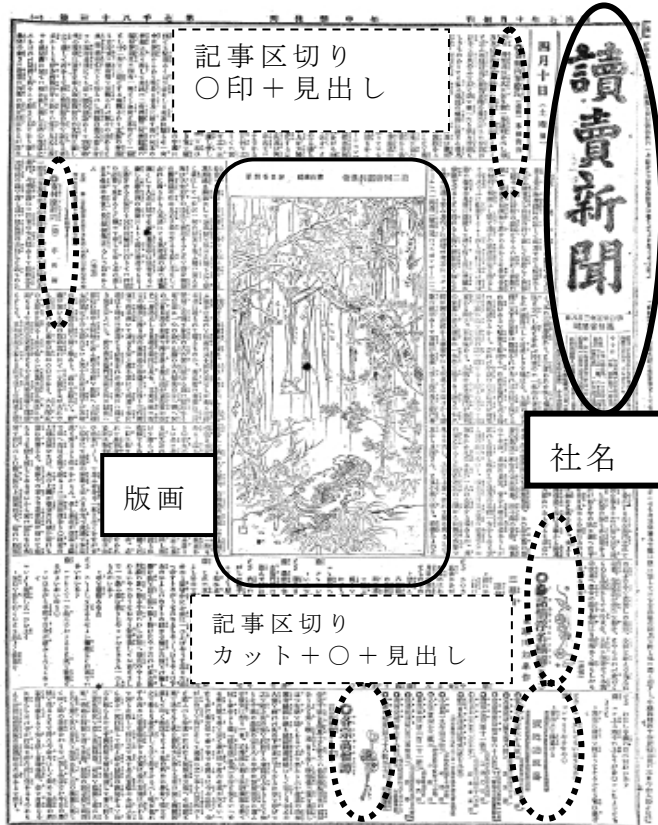
「ルビを付ける

「横罫線で段を区切る

「縦飾り線+カットで欄を区切る

「視覚的要素は○、図版(挿し絵)、カットに増える

- ① 右上に社名、下に会社データ、
- ② 欄上に発行年や号数のデータ、
- ③ 記事の最初に日付
- ④ 「○」+大活字見出し+作者で記事の区切りを示す
- ⑤ 漢字、平仮名、カタカナ+変体仮名の記事
- ⑥ 欄外右にも小活字の記事欄



1897 (明治 30) 年 4 月 10 日 一面

「最初の行に重要記事一覧「目次」、「▲」+大活字+作者で見出を付けて、論説記事を並べる

「上野図書館新着重要書目「家庭小説」などの連載記事

「七段組で、同じ大きさの活字と小型活字で版組

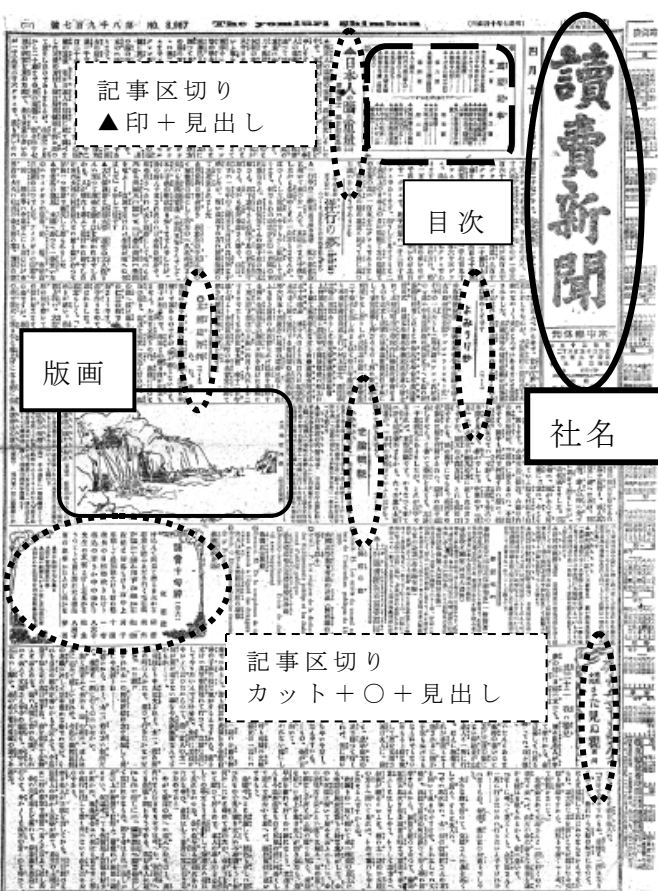
「ルビを付ける

「横罫線で段を区切る

「縦飾り線+見出しで欄を区切る

「視覚的要素は○、▲、図版(挿し絵)、カット、飾り枠に増える

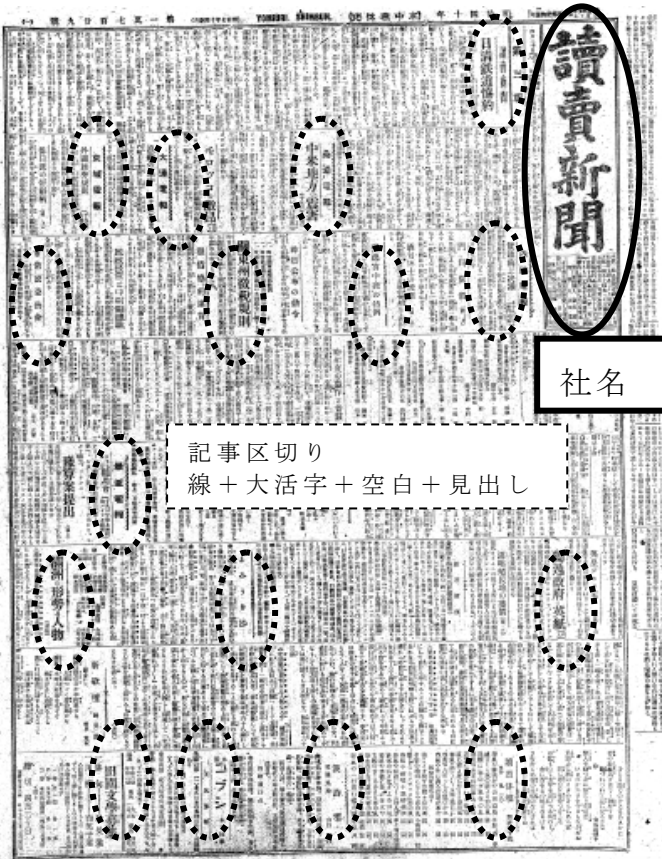
- ① 右上に社名、下に会社データ、
- ② 欄上に発行年や号数のデータ、
- ③ 記事の最初に日付
- ④ 「▲」+大活字見出し+作者で記事の区切りを示す
- ⑤ 「○」+大活字見出し+作者で記事の区切りを示す
- ⑥ 漢字、平仮名、カタカナ+変体仮名の記事
- ⑦ 欄外右にも小活字の記事欄



1902 (明治 35) 年 4 月 10 日 一面

「大活字で見出を付けて、記事と各コラム欄を示す」
 「ニュース類の「電報」欄と「よみうり抄」「世論概観」などのコラム欄、「新歌壇」などの連載記事と広告の区切り」
 「八段組で、同じ大きさの活字と小型活字で版組」
 「ルビ、傍点を付ける」
 「横罫線で段を区切る」
 「縦飾り線、飾り見出しで欄を区切る」
 「視覚的要素は○、飾り線に減少」

- ① 右上に社名、下に会社データ
- ② 欄上に発行年や号数のデータ、
- ③ 記事の最初に日付と「第三版」
- ④ 大活字見出し+空白で記事の区切りを示す
- ⑤ 「読売新聞」の論説記事、「倫敦電報」「桑港電報」「大連電報」などのニュース記事とコラム記事、広告
- ⑥ 「○」「▲」は小記事の区切りを示す
- ⑦ 漢字、平仮名+カタカナの記事欄
- ⑧ 欄外右にも小活字の記事欄



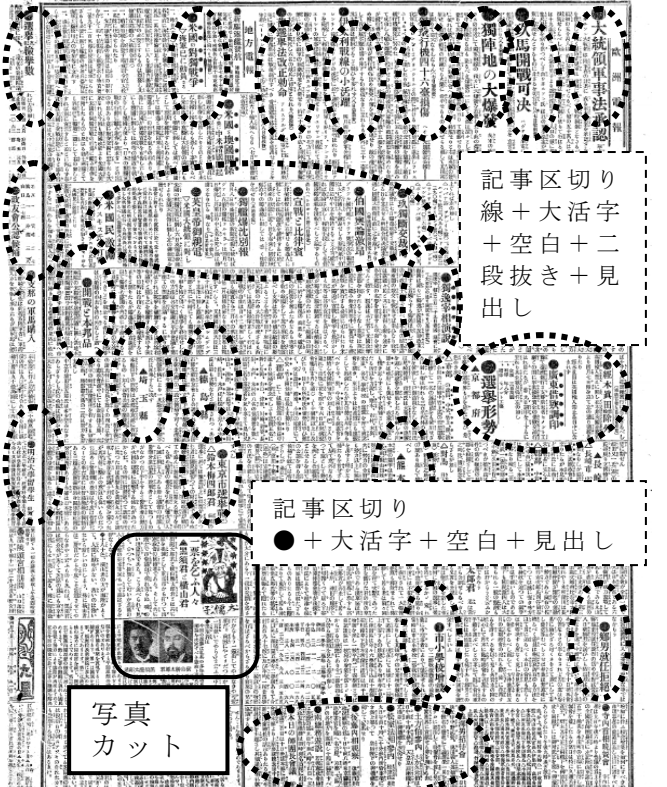
1907 (明治40) 年4月10日一面

「大活字で見出を付けて、記事と各コラム欄を示す」
 「「論議」「銀座より」「書籍と雑誌」などの記事欄と「戯曲」、
 広告欄の区切り」
 「八段組で、同じ大きさの活字と小型活字で版組+大枠の広告欄」
 「ルビ、傍点を付ける」
 「横罫線で段を区切る+下に広告欄」
 「縦飾り線、飾り見出し、カットで欄を区切る」
 「視覚的要素は▲、飾り線、カット、広告の図版、飾り文字」

- ① 右上に飾り文字の社名、下に会社データ
- ② 欄上に発行年や号数のデータ、
- ③ 「論議」「銀座より」「書籍と雑誌」などの記事欄と「戯曲」、
 広告欄
- ④ 大活字見出し+飾り線、カット+空白で記事の区切りを示す
- ⑤ 「▲」は小記事の区切りを示す
- ⑥ 漢字、平仮名+カタカナの記事欄
- ⑦ 欄外右にも小活字の記事欄



1912 (明治45) 年4月10日一面

1917（大正6）年4月10日一面		① 横抜き、縦抜きで大小の欄の区画を設ける ② 基本は五段組で、大判活字で大見出し、中小型活字で小見出しや内容の版組 ③ 一部にルビを付ける ④ 横罫線で段を区切る ⑤ 縦と横の区画線、飾り見出し、大活字、カットで欄を区切る ⑥ 視覚的要素は▲、●、■と飾り線、カット、広告の図版、各種飾り文字、レタリック書体 ⑦ 右上に飾り文字の社名、下に会社データ ⑧ 1面は全面広告、2面に記事 ⑨ 大活字見出し、飾り文字、レタリック書体、飾り線、カット、挿し絵で広告の区切りを示す ⑩ 漢字、平仮名、カタカナの記事 ⑪ 欄外右にも小活字の記事欄
1917（大正6）年4月10日二面		① 「欧州電報」「地方電報」のニュース記事と「犬儒子のコラム」記事 ② 大小の「●」「▲」は大活字見出しで記事の区切りを示す ③ 「▲」「△」は小記事の区切りを示す ④ 漢字、平仮名、カタカナの記事 ⑤ 欄外左にも小活字の記事欄 ⑥ 「●」+大活字で見出しを付けて、記事と各コラム欄を示す、主要記事は〰段抜きの見出し ⑦ 「欧州電報」「地方電報」などの記事欄と「犬儒子のコラム」記事の区切り ⑧ 九段組で、同じ大きさの活字と小型活字で版組十二段抜きの記事+空白のある見出し ⑨ ルビ、傍点を付ける ⑩ 横罫線で段を区切る ⑪ 縦飾り線、飾り見出し、写真で欄を区切る ⑫ 視覚的要素は●、▲△、飾り線、写真、飾り文字

（注1）『ヨミダス歴史館』の各年月日 PDF のから論者制作

（注2）図中の記号：太線枠（社名欄）、点線枠（記事と見出し）、中線枠（図版）、太点線（目次）の注目点

紙面空間の表現目的に応じた意識的な利用が始まっていた状況が窺われ、読みやすさを考えた記事配置がすでにこの時代から行われていたと考えられる。マルチモーダル要素のメタ・テキスト的機能がすでに意識されていたことが分かる。1887（明治10）年は、西南戦争の時代で新聞の報道機能が広く社会に知られ、東京の有力紙が戦争報道で活況を呈していたと言われる。¹⁷こうした新聞のマルチモーダル表現の萌芽とも言える紙面デザインも当時の新聞の隆盛を反映して、確立されたと考えられる。

ただ、本文の表記は、漢字、平仮名と変体仮名を加えた記事で、江戸時代的名残が見られ、各記事に見出しは付けられていない。また、読者の識字率もあってか漢字には振り仮名が付けられている。しかし、振り仮名は、実は現代のマルチモーダル表現の一分野であるアクセシビリティ表現の一種で、読者の読みやすさを意識した日本語的工夫である。振り仮名は、日本語の書き言葉の文化の中では、すでに平安時代の漢文訓読にまで遡りうる表記法の文化で、江戸時代の黄表紙等では庶民向けの出版物には挿し絵と共に広く取り入れられており、文字に関するマルチモーダル表現は実は日本語の発展とともに歴史を遡ることができる分野でもある¹⁸。こうした点については、稿を改めて考察をおこなうことにする。

さて、以降の紙面変化を概観すると、1877年の紙面デザインは、表3のように、細部の変更はあっても以降も継承されているが、その後の記事面での大きな変化は、見出しの確立である。今回のデータでは1892（明治25）年から明確に本文と区画された見出しが設けられ、また見出しをまとめた目次が作られるようになっている。そして、1897（明治30）年からは、さらに大きな変化として、視覚要素の多様化が見られる。この時期には、それまで使われていた「○」印に加えて、大型の図版（版画）が用いられ、同時に見出しや区切

¹⁷ 春原昭彦（2007）『四訂版・日本新聞通史—1861年—2000年』新泉社 P38

¹⁸ 振り仮名のマルチモーダル性については内山和也（2002）「振り仮名表現の諸相」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』51号 P301-309 参照。

りに添える形で飾り線やカットを加えるデザインが見られるようになった。新聞の発展史の中では、明治 30 年代は近代新聞の確立期と言われ、発行部数の増大と各社の競争激化、手作業の足踏式印刷機から輸入された機械式輪転機による機械印刷の普及、写真版や多色刷の発展がめざましくなり、広告掲載量も拡大した¹⁹。今回のデータからは、今までの新聞史とは異なる注目点として、マルチモーダル表現の発達をあげることができる。1880 年代までのただ記事を並べるだけの新聞から、1890 年代には、内容を整理して提示するメタ・テキスト表現である、記事の構成を示す目次や見出しが設置され、言語表現の内容と非言語の視覚効果を明確に意識して図版や装飾デザインを用いるという、現在と共通する編集意識が明確になってきている。

3.2 1900 年代から 1910 年代における紙面デザインの発展

さらに、紙面デザイン上の次の変化は広告に現れる。1907（明治 40）年には、それまでの文字だけの広告スタイルから、飾り文字、レタリック書体、縦横抜き、大型図版など現在と変わらないマルチモーダルな言語・非言語表現の効果を考えたデザインが用いられるようになっている。記事の文体面でも、明治の終わりには大きな変化が見られ、1907（明治 40）年から変体仮名の使用がなくなり、現代と同じ、漢字＋平仮名＋カタカナの使用に変わっている。文字表記体系の整理が進んだことが伺える。

続いて 1912（明治 45）年からは、見出しの前後に空白を設けたり、カットを加えたりして視覚効果に溯及する見出しデザインが明確に用いられるようになり、大正時代の 1917（大正 6）年に入ると、広告が第 1 面全体を占めると同時に、記事は内容ごとに各面に分類配置されて、「●」印に縦抜きの大版または中版の活字を用いた見出しで配置されるようになり、記事の分類が明確に行われるようになっている。また、二段抜きのトップ記事と一段組のその他の記事、

¹⁹ 同注 15P90, 91

コラム記事などの区別が生まれている。ほぼ、現在と同じ新聞の紙面デザインはこの時期に始まったと考えられる。新聞史の中では、明治45年は明治天皇崩御で大きな日本社会のエポックになり、大正期は近代新聞の成熟期と呼ばれている。大正デモクラシーとの関係で藩閥政治との対決が新聞記事の中心になった²⁰。しかし、こうした言論面、思想面ばかりではなく、表現面でも現在用いられている新聞紙面の基本的デザインは1912～1917年頃に革新が起こって確立され、基本的な技法は現在まで変わっていないと考えられる。

3.3 日本近代の新聞におけるマルチモーダル表現の役割

以上、現代の紙面デザインと比較しながら見てきた明治期の1870年代から大正期前半の1910年代までの資料は、日本の近代メディアとしての新聞が独自に発展を遂げ、思想界や言論界で次第に重要な役割を果たし、また広く大衆から支持されるメディアとして進化していった過程と相即している。その近代新聞の発展過程で、見てきたように、見出しの確立や図版の利用など内容の可視性やアピール性の向上にマルチモーダル表現が重要な役割を果たしていたことは明らかであろう。

言語要素と非言語要素を組み合わせた統一的質的表現であるマルチモーダル表現が現代日本での研究テーマとして明確になったのは1990年代以降であるが、今回の資料から見ると、実は、1910年頃から印刷メディアの中では、読者に対してマーケティング効果やアピール効果を考えた、記事と広告のマルチモーダルデザインが明確に意識され、近代的新聞制作と表現技術の重要な分野として確立されたと考えられる。現代の日本社会で新聞が高い信頼を寄せられている背景には、日本近代での、言語表現の内容理解に密接に関係する、こうしたマルチモーダル表現技術の発達があると推測できよう。同時に、こうした変化は記事の言語表現の変化と連動しており、振り仮名など文字表記の発達と合わせて、マルチモーダルの重要領域で

²⁰ 同注 15140P

あるアクセシビリティ向上とも深く関わっている。

近代から現代にかけての日本社会においては、今回の事例研究で一端が窺えるようにメディアの発達と言語表現の発達が相即しており、こうした具体的ジャンルを持ったメディアの中での言語・非言語のマルチモーダル表現の変化を日本語の表現法発達史としてより広く捉えていく必要があると言えよう。

4. おわりに

以上、世界的にも最大規模の新聞と言える読売新聞について、マルチモーダル表現の視点から現在の紙面デザインと明治・大正前期の紙面デザイン変化を比較してきた。その結果、現代と共通する紙面デザイン技法が 1910 年前後に明確に確立されていたことが分かった。そして、言語表現に付随する視覚効果による非言語表現（タイプ 2）の活用ばかりではなく、言語表現としての記事の理解やアピール度を高める効果を持つ記事での表記の変化や見出しの確立、段組変化による可視性の向上に連動していることが分かった。これはいずれもメタ・テキスト表現としてのマルチモーダルな言語要素・非言語要素の機能への自覚がこの時期、起こったことを示している。現代の新聞を見なれた認知的意識から見ると、現代の方が明らかに記事の理解やアピール度を高める表現効果が重層的に用いられているのは確かであるが、大事な点は、現代の技法に繋がる源泉的表現やデザイン意識が明確に 1910 年代に確立され、それが現代まで多様に発展してきた点である。現在の常識から過去を価値判断するのではなく、過去の状態から現在の常識を見ることで、逆に、こうした多様なマルチモーダル表現の発達の過程が理解でき、同時に系統性や質的变化も見出すことができると言えよう。

また、マルチモーダル表現の広がりにも目を向けることも重要である。現代のマルチモーダル表現研究は動画や映像ジャンルに焦点が限定されがちであるが、それは情報通信技術の発展に目を奪われた認知的バイアスだと言えよう。確かに 1980 年代の MS-DOS 環境では

画像処理は非常に難しく、視覚効果を利用した Apple の製品があったとしても PC や記憶装置の性能も画像や動画処理には向かなかったため、マルチメディア化は MS-Windows によるパソコン技術が視覚的発達を始めた 1990 年代から始まった。しかし、マルチメディア化に伴うパソコン関係のマルチモーダル表現だけに分野が限定され理解されることは、それ以前から発達していた印刷メディアや他の多様なマルチモーダル表現の存在を見失わせることになる。

今回の新聞はもちろん漫画、雑誌、広告、図書、パンフレット類など印刷メディアでのマルチモーダル表現は、今までの日本語の表現文化の発展の過程で独自の発達を遂げてきた分野であると考えられる。現在、注目されているマルチメディアのテレビや映画の映像、ゲームやインターネットのアニメ、動画等以外にも、平面メディアにも、そして何より我々の日常の言語表現活動そのものにマルチモーダル表現は多様に存在している。そして、それらは相互に異なる明確なジャンル性を持っている。たとえば、情報の伝達や訴求効果を中心に行っている新聞でのマルチモーダル表現と、想像力やイメージ喚起を中心に行っていると考えられる絵本や小説でのマルチモーダル表現は、同じ言語要素・非言語要素であっても機能は同一ではなく、極めて異質な点があると考えられる。それは、今回見たようにメタ・テキスト的表現と密接な関係を持っている。言語・非言語を含む表現全体をマルチモーダルの視点で見直すことで、より創造的で豊かな言語教育や表現活動が生まれるであろう。そして、それは歴史的淵源を持ち、進化、発展や退化、衰退を経て、継承されてきた、国際的な比較が可能な表現文化であると考えられ、日本語教育をより豊かに発展させる機縁となりえるであろう。

多様なマルチモーダル表現について、今後も多様性の追求を試みていきたい。

注記

本研究は、2014年3月1日に日本国愛媛大学で開催された「日本比較文化学会中四国支部例会」で発表した内容に大幅な加筆修正を加えたものである。本研究成果は、科技部專題研究計画 102-2410-H-032 -033 -の一部である。

資料

読売新聞（2006）『読売新聞縮刷版 2006年10月』読売新聞社
読売新聞『ヨミダス歴史館』データベース

参考文献

- 内山和也（2002）「振り仮名表現の諸相」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』51号 P301-309
- 落合由治（2011）「メディア・テキストにおけるビジュアル要素の形式とその機能」『台湾日本語文学報』29P169-194
- 落合由治（2012）「日本語新聞におけるビジュアル要素の記述とその教育的活用の試み—日本語教育の教材論拡大を目指して—」『CAJLE 2012（カナダ日本語教師会 2012年度大会）』2012年8月2-3日
- 落合由治（2012）『台湾日日新報』の掲載広告に見る身体性表象』『台湾日本語文学報』31P153-178
- 落合由治（2012）「昭和前期『台湾日日新報』紙面のマルチジャンル論的視点による考察—広告と記事のデザインを中心に—」『日本論叢』26P175-200
- 門倉正美（2007）「リテラシーズとしての〈視読解〉—「図解」を手始めとして」『リテラシーズ』3P3-18
- 門倉正美（2011）「コミュニケーションを〈見る〉—言語教育におけるビューイングと視読解（特集 日本語教育が育成する日本語能力とは何か）」『早稲田日本語教育学』8・9P 115-120、
- 木原郁子（2010）「話し合いの進行に関わるメタ言語表現—参加者の相互関係の観点から」『日本文化研究』34P485-502
- 社会言語科学会（2012）「特集相互作用のマルチモーダル分析」『社会言語科学』14
- 泉子・K・メイナード（2008）『マルチジャンル談話論—間ジャンル性と意味の創造』くろしお出版
- 日本語学会（2012）「特集 2010年・2011年における日本語学界の展望」『日本語の研究』8-3号
- 日本新聞博物館 <http://newspark.jp/newspark/index.html>（2013年8月14日閲覧）
- 野村眞木夫、畔上歩美（2011）「絵本『ごんぎつね』のスタイルとマルチモダリティ」『上越教育大学研究紀要』30
- 野村眞木夫（2010）「マルチモーダル・テキストとしての絵本—言語テキストと絵画テキストの関係性と類比性」『上越教育大学研究紀要』29
- 野村眞木夫（2012）「文学テキストにおけるマルチモダリティの可能性：物語絵本から Extremely Loud and Incredibly Close まで」『上越教育大学研究紀

要』31

春原昭彦（2003／2007）『日本新聞通史四訂版』新泉社

坊農真弓・高梨克也（共編）（2009）『多人数インタラクションの分析手法』オーム社

三宅和子・佐竹秀雄・竹野谷みゆき編（2009）「特集：現在（いま）を読み解くメソドロジー」『メディアとことば』4

三吉秀夫、関進、綿貫啓子（2000）「マルチモーダルインターフェイス」『シャープ技報』77号 <http://www.sharp.co.jp/corporate/rd/journal-77/12-1.htm>（2013年8月14日閲覧）

村上祐介（2011）「教育学における事例研究の方法論再考：定性的研究における比較の方法（＜特集＞教育学における新たな研究方法論の構築と創造）」『教育學研究』78-4P398-410

山本文雄編著（1998）『日本マス・コミュニケーション史（増補）』東海大学出版会

吉永崇史（2011）「経営組織論における質的研究とその意義」『質的心理学フォーラム』3P73-83